

“Synopsis der Magenkrankheiten”

Klinik, Gastroskopie und Röntgenbefund-Ein Atlas

Prof. Dr. Med. Klaus Krentz

独協医科大学内科

原 田 尚

非常に要領よく書かれた上部消化管疾患診断概観(アトラス)(200頁), であり, 特に内視鏡所見に重点をおいて明快に解説されている。

わが国では胃疾患についてすでにすぐれた数多くの著作が出版されているが, 欧米ではこの手の書籍は珍しい。著者の Klaus Krentz 教授は Aachen の Luisen 病院内科の chef-Arzt である。一読, 胃癌・胃炎などの項に関してはややものたりなさを感じる点もあるが, 欧米の実態に応じてバランスよく上部消化管各種疾患を網羅しており, 文献もわが国のものも含めて最近のものまで比較的良好に集録されている。

全篇は16の章にわかれ, 序論では内視鏡検査の歴史が述べられ, Hirschowitz (1956年) に始まったファイバースコープ内視鏡がオリンパス・町田などを中心に発展した過程が

写真入りで解説されているのは, わが国の内視鏡研究の水準の高さを示すものとして誇り高い感じがする。

第2章は胃鏡検査の適応, 不適応について解説され, 第3章以下が各論にあてられている。

第3章: 食道と胃噴門部病変(食道および胃噴門静脈瘤・食道癌等), 第4章: Osler 病, 第5章: 胃粘膜のピラン(平滑出血性, 完全・不完全型ピラン), 第6章: 胃憩室, 第7章: 胃潰瘍(各部位の潰瘍, 単発性・多発性潰瘍, 線状潰瘍等), 第8章: 胃癌(早期癌, ポリープ様または増殖性癌, 潰瘍癌, 皿状癌, 硬性癌の5型にわけて解説), 第9章: 胃リンパ肉腫, 白血病, Hodgkin 病等, 第10章: 良性腫瘍(平滑筋腫, 線維腫, 脂肪腫, 腺腫, 多発性ポリープ, 胃迷入腺等), 第11章: Ménétrier 病, 肥厚性胃炎等, 第12章:

胃結核症, 第13章: まれな胃疾患(黄色腫, 異物等), 第14章: 手術胃(Billroth I 型, Billroth II 型等), 第15章: 手術後癌再発である。

各章ごとに興味ある数症例をあげ既往歴, 臨床像, 検査成績, X線所見, 胃内視鏡所見にまとめをつけ, さらに各章の終りに簡単・明瞭な解説がついている。

通読し, 胃疾患の概要を知りうる便利な本で, アトラスとしても貴重である。胃X線写真は充盈像, 圧迫像を主にしたよい写真であり, 188葉におよぶ豊富な内視鏡カラー写真のレベルも高い。

消化器病学に関心を持つ臨床医・研修医に広くすすめられる好著である。

203 S. 370 Abbildungen, davon 188 Vierfarbig, 7 Tabellen, Georg Thieme Verlag, 1974, Stuttgart, 22,200円

医学書院洋書部扱い